

院内研修会・医療セミナー 開催報告



弘前大学教授
斉藤 敦志 先生

去る2月29日、職員を対象とした「医療セミナー」を開催しました。今回は弘前大学大学院 医学研究科 脳神経外科学講座 教授・斉藤敦志先生に「脳血管疾患の外科治療に挑む」と題してご講演いただきました。弘大脳神経外科学講座の紹介に始まり、県内の脳神経外科医が不足している現状、他院との協力体制についてお話しされました。斉藤教授のご専門は脳血管障害で、くも膜下出血や脳梗塞について研究されています。

なぜ血が通わなくなったら脳が死ぬのか、アポトーシス（細胞死）のメカニズムについての研究に取り組み、「機能的ナノ粒子」を開発したことなど、これまでの研究の一端について紹介されました。



また、難しい動脈瘤の手術について、実際に手がけた手術を二例、動画を映しながら手法について詳しく解説されました。このような難しい手術を行う

にはトレーニングが必要で、若手医師の指導の際は、より実物に近い状態（柔らかさやベタつき感）を再現するため、人工血管だけでなく手羽先の血管やイクラの皮を用いるという面白いお話もありました。ヤギを使った開頭手術のトレーニングでは東北大や秋田大など県外の大学にも呼びかけ連携しながら行っているとのことでした。

また、弘大病院での新たな取り組みとして、頭痛外来を開設、頭痛診療の啓発活動の拠点を目指していることや、先生が15年前から取り組んできたカンボジアでの医療支援活動について教育プロジェクトを創設したことなど、非常に有意義な講演でした。今回のセミナーには137名の職員が参加し、みな熱心に聴講していました。斉藤先生ありがとうございました。またこのような研修会の機会を設けていきたいと思っております。

また、弘大病院での新たな取り組みとして、頭痛外来を開設、頭痛診療の啓発活動の拠点を目指していることや、先生が15年前から取り組んできたカンボジアでの医療支援活動について教育プロジェクトを創設したことなど、非常に有意義な講演でした。今回のセミナーには137名の職員が参加し、みな熱心に聴講していました。斉藤先生ありがとうございました。またこのような研修会の機会を設けていきたいと思っております。

編集後記

最近暖かい日が増えたり日も徐々に長くなったりと、春が近づいているのを実感しています。今年は暖冬の影響なのか、桜の開花も早まる事が予想されているようです。平年より4日ほど早く開花し、ゴールデンウィーク前には満開になると嬉しいニュースも目にしました。今から待ち遠しく思います。みなさんのおすすめお花見スポットぜひ教えてください。(K. S)



雄心会 保育施設 かでるきっず卒園式

去る3月16日、当院付設の保育施設「かでるきっず」で卒園式が行われました。今年は8名の園児が巣立ちの日を迎えました。ひとりひとり名前を呼ばれと元気よく返事をして卒園証書を受け取りました。立派に成長した子どもたちの合唱に思わず涙ぐむ父兄もいました。「かでるきっず」は0～5歳時を対象としており、当院職員のお子さんをお預かりしていますが、地域住民枠も設けております。入園をご希望の方はお問い合わせ下さい。



当院からのお願い

ご予約やお問い合わせなど
当院へお電話される場合は
お掛け間違いのないようお願いいたします。



KADERU vol.32 まちがいがしの答え



KADERU



[世界一の桜並木(弘前市)]
撮影 工藤 明

Contents

- 新年度を迎えて 片山 容一
- 脳神経内科医が語る医学雑学 第10回
Lou Gehrig 病 布村 仁一
- 総合診療科よろず医療 第11回
総合診療科について 佐々木 光太
- 部署紹介 6病棟
- TOPICS

もしかして 脳卒中?! ~ こんな症状があれば様子見ではなく、すぐに119番へ! ~

F ace (フェイス) 顔の歪みや 顔の麻痺	A rm (アーム) 腕や足に 力が入らない	S peech (スピーチ) 言葉が出ない ろれつが回らない	T ime (タイム) 症状に気付いたら 至急119番!
--------------------------------------	-------------------------------------	---	---

Time is Brain (時は脳なり) ... 脳梗塞の治療では発症より血行再開までの時間短縮が重要です!!

新年度を迎えて



今年度、当院は開設から 8 年目を迎えることになります。少しずつですが、青森市とその周辺の医療にとって、なくてはならない存在になってきたように思います。地域の皆さんの温かいご支援と、職員の皆さんのたゆまぬ努力のおかげです。心より御礼を申し上げます。

当院は、伊藤丈雄理事長の脳神経外科医としての実績をもとに、脳疾患・脳卒中の高度医療を担う専門病院であることを意識して開設されました。しかし、今では、幅広い医療を引き受ける病院としても、地域の皆さんに頼りにしていただけるようになってきています。

当院は、当初から、信頼できる病院であることはもちろん「安心できる病院」でもあることを目標に掲げ、いろいろな工夫を重ねてきています。そのためには、職員の皆さんにとっても「働きやすい病院」でなければなりません。働きやすければ、心に余裕を持って、きめ細かな心配りができるようになります。それが誰にとっても安心につながります。

現代の医療は、いろいろな職種の人びとがチームとして働いています。働きやすい環境を整えるには、なによりもまず、チームの一人ひとりが、お互いの仕事に敬意を持ち、お互いの仕事への配慮や感謝を忘れないように心がけなければなりません。

昨今、国をあげて働き方改革が進められています。当院も、引き続き働き方改革に取り組んでいきますが、そのためにも、円滑に機能するチームを構築することが大切だと考えています。まだまだ道半ばですので、今までも増してこのことに留意していきたいと思います。

新しく入職された方々とともに、地域の皆さんにとって「安心できる病院」であり、職員の皆さんにとって「働きやすい病院」であることを目指して、力を合わせていきたいと思ひます。どうぞ宜しくお願い致します。

総長 片山 容一



連載

脳神経内科医が語る医学雑学 (全12回)

第10回 Lou Gehrig 病

皆さんこんにちは。青森新都市病院 脳神経内科の布村です。今回は Lou Gehrig 病についてお話します。Lou Gehrig、なんて読むかわかりますか？ルー・ゲーリック、人の名前です。ペーブ・ルースなどと同じ頃、ほぼ 100 年前に活躍したアメリカの野球選手、メジャーリーグの大スターです。なぜ野球選手の名前が病気の名前になったのでしょうか？実はゲーリックは 34 歳という現役選手としての絶頂時に突然不調に陥りました。ファンや同僚はそのうち調子を取り戻すだろうと思っていましたが、それどころか状態は悪化し全身に力が入らなくなり、打つことも走ることもできなくなってしまったのです。結局彼は調子を取り戻すことなく翌年引退してしまいます。その後、彼は神経内科医に筋萎縮性側索硬化症という診断を受け、37 歳で死亡します。このため未だにアメリカでは筋萎縮性側索硬化症は Lou Gehrig 病と呼ばれることが多いです。

筋萎縮性側索硬化症は ALS とも呼ばれ、全身の筋肉を動かしている運動神経が変性消失していく疾患で、最終的には寝たきり、それどころか物を食べることもしゃべることもできず、最後は呼吸することもできなくなります。それなのに多くの患者さんの感覚は正常に保たれ、意識も、認知機能も



保たれています。原因も不明で治療法もなく、難病中の難病と言われています。全国に約 1 万人、青森県には 100 人強の患者さんがいます。呼吸、栄養管理がなされれば 10 年以上の予後を期待できる患者さんもいますが、しゃべることができないことからコミュニケーションが困難でご家族、医療者側のかかり方がとても大切になります。

最近、医師が死にたいと希望していた ALS 患者さんを薬剤投与で死に至らしめ、殺人罪で裁判が行われているニュースをご覧になった方も多いでしょう。このケースでは難病の安楽死を認めるべきかという論議に置き換わったようなコメントも多く寄せられていますが、主治医でもない医師が、患者さんとじっくり向き合い、時間をかけて今後の療養について話し合った上での結

脳神経内科 部長
布村 仁一 先生



論でもないようですから、言語道断だと思います。神経内科医にとって ALS は避けて通れない疾患で、最高の苦難を背負った患者さんとどう向き合うべきか、患者さんによりよい人生をどう送ってもらうのか、常に考えさせられる疾患です。以前関わらせて頂いた患者さんには、人工呼吸器をつけながら随筆を執筆したり、車で旅をしたり、同じ疾患の患者さんを励ますため飛行機で全国を飛び回っていた患者さんもおり、生きるということの意味を学ばせてもらった病気でもあります。



部署紹介 6病棟

看護師長 鳴海夏菜子 さん



こんにちは。6病棟をご紹介します。

6病棟は主に内科的疾患の患者さんが入院されている病棟です。一言で内科的疾患と言っても、内視鏡検査、治療が必要な消化器内科や、慢性心不全の急性増悪を繰り返す循環器内科、他院で急性期治療を終えてリハビリ目的に入院となる方、その他肺炎、尿路感染、糖尿病など、幅広い疾患の方が入院されています。患者さんのほとんどが高齢で、生活習慣病から繰り返しの入院となる方もいらっしゃいます。そのため、治療を進めながら退院後の生活についてご家族と話し合いを進め、多職種と連携しながら必要な社会資源の提供など、最良の選択が出来るようお手伝いさせて頂いております。

スタッフは 20 代から 50 代まで幅広い年代のスタッフが勤務しています。特に 20 代のスタッフが多く所属し、ベテラン看護師たちと明るく和気あいあいと働いています。これからもスタッフ一同、患者さんとそのご家族、地域の方々の心に届く看護を目指していきます。



※役職は 2024 年 3 月現在のものです

総合診療科 よろず医療

第11回 総合診療科について



総合診療科 医長
佐々木 洸太 先生

3-4 月と門出の季節になりました。別れもあれば出会いもあり、2 年間苦楽をともにした斉藤医師が新たな出会いと経験を求めて他院へ移ります。信頼する後輩であり、友人である彼との別れの寂しさと心細さは筆舌に尽くしがたいですが、当院では得ることが出来ない知識や経験を新しい職場で積んでほしいと考えています。

さて、今一度、私自身が考える「総合診療科」「病院総合医」についてお話しさせていただきたいと思ひます。当科では一般的な風邪や胃腸炎、関節痛の診療だけではなく、様々ながんの抗がん剤治療や緩和医療、関節リウマチや膠原病や間質性肺炎の治療も担当しています。総胆管結石や早期胃癌の内視鏡治療も行い、神経性食思不振症（拒食症）や心的外傷後ストレス障害（PTSD）、抑うつ気分や双極性障害などの気分障害と身体症状の両面の管理が必要な疾患の診療も担当しています。さらには少人数ながら在宅診療も行い、年間数十名の方の在宅や施設での最期をお手伝いさせて頂いております。3 月までは消化器一般外科の手術助手も務めておりました。高齢者や複数の疾患を抱える患者さんが増えている中で、診療科を絞れない患者さんや複数の診療科の検査や治療が同時に必要な患者さんが増えています。どんなに大きな病院で専門医が

複数揃っていても、疾患や病状が複数の診療科にまたがっている場合には、「どちらの治療を優先するべきか」、「どちらが最後・最期まで診療する科なのか」が問題になります。また、大きな病院では病状が悪化した場合に最期まで診療を担当できない場合が多々あります。当院のような中小の病院でかつ、私のようにさまざまな検査・治療、診療を担当する医師は、今後の地域において隙間を埋める存在だと自負しております。ご自身で受診診療科を決められない場合や絞りづらい場合などはご遠慮なくご相談ください。開業医の先生方におかれましては「診断が難しい場合」や「複数の診療科に問題がまたがる場合」、「介護や社会的な背景から高次医療機関の専門医へ相談しづらい場合」などはお気軽にご連絡ください。

私のような総合医は少数派であり、一般の患者さんやご年配の医師や臓器別専門医から見れば、方向性や将来像がわかりにくいと思ひます。よく「結局何科なの？」「一貫性がない」などと心ないことを言われ、傷つくこともありますが、まだまだ新しい領域である総合診療科を正しく知っていただくために今後も頑張っていく所存です。この連載でもいろいろと紹介していきますので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

